

[原著]

中学生のキャリア観に関する研究

筑波大学大学院人間総合科学研究科：佐藤 純
山形大学地域教育文化学部：広田 信一
高松大学発達科学部：向居 暁

A study about the career view in junior high school students

Jun Sato, Shinichi Hirota and Akira Mukai

問題と目的

中学生の多くは、まだ「働く」ことに直面していないが、自己意識の発達に伴い自分がどのように生きるか、つまり、自分のキャリアを意識し始める年代であると言われる。また近年、フリーターやニートなど若年者の就労問題が社会的に大きく取り上げられ、教育機関においてキャリア教育を重要視する動きも目立ってきている。

先行研究（広田・佐藤，印刷中；佐藤・広田2004）において、高校生・大学生を対象としたキャリア観について検討を行ったが、中学生は高校生や大学生とは異なる特徴を持つと予想される。例えば、自分のキャリアを考えることは、未来に対する認知を必要とするため、時間的展望のあり方によってキャリア観が異なる傾向を持つ可能性がある。そこで本研究では、時間的展望を要因として取り上げ、キャリア観との関連性について検討を行う。

先行研究（広田・佐藤，印刷中；佐藤・広田2004）において、高校生・大学生を対象としたキャリア観について検討を行ったが、中学生は高校生や大学生とは異なる特徴を持つと予想される。例えば、中学生の職業観に関する先行調査では、約6割の中学生が将来なりたい職業があると回答している。しかしその職業に向かって具体的に努力していると回答した中学生は、その約6割であり、同様の質問に対する高校生

の回答が約8割であったことに比較して少ない（Benesse 教育研究開発センター，2005）。これは具体的な職業を選択し実際にその職業に就くまでの時間的差異をどのようにとらえているのかといった時間的展望と関連が深いと思われる。

現在の自分と将来の職業をつなぐ時間の推移に対する評価は、物理的次元における時間量そのものではなく、心理的次元である時間的展望に関連した変数であることが予想できる。そのため例えば、自分のキャリアを考えることは、未来に対する認知を必要とするため、時間的展望のあり方によってキャリア観が異なる傾向を持つ可能性がある。そこで本研究では、時間的展望を要因として取り上げ、キャリア観との関連性について検討を行うこととした。

なお本研究では、働くことと生きることを無理に区別するのではなく、それらを包含した価値観をキャリア観として、研究対象とすることとした。労働に関する問題は生き方の問題と密接な関係があると捉えることが可能であり、「働くこと」の価値観を明らかにするためには、働き方と生き方の両者を同時に検討することが必要であると考えられるからである。また、そうしたキャリア観は一次元的価値から構成されていると考えるよりも、複数の次元からアプローチすることが必要であると推測できる。そこで本研究では、先行研究（広田・佐藤，印刷中）に倣い、ゴール次元とマスト次元という次

元を設けて2つの切り口から検討を試みることにした。ゴール次元とは、「何のために働くのか」という労働の目的に関する価値観を問う次元であり、マスト次元とは、「将来はどうあらねばならないか」という生き方に関する価値観を問う次元である。

方 法

調査対象 H県の公立中学校の生徒236名（男子119名、女子117名）が調査に参加した。

調査内容

(1) キャリア観測定尺度（広田・佐藤，印刷中）：本尺度は、大学生および高校生を対象として作成された尺度であるが、中学生でも十分に理解可能な項目内容であると考えられる。本尺度はゴール次元尺度とマスト次元尺度から構成され、ゴール次元では「何のために働くのか」という点から、マスト次元では「自分の将来がどのようにあらねばならないか」という点からキャリア観に注目するものである。両尺度ともに35項目（7下位尺度）から成り、両尺度の項目内容は対応する形になっている。例えば、例えば、ゴール次元尺度では「人はどうして働くのだと思いますか」という教示を行い、それに対して「自分の夢を実現するため」という項目が挙げられているが、それに対応するマスト次元尺度の項目として「自分の夢を実現しなくてはならない」という項目が作成された。マスト次元尺度では「自分の将来がどのようなものでなくてはならないと思いますか」という教示が示されている。このように項目内容に対応させることにより、両次元の比較が可能となると考えられる。7つの下位尺度は以下の通りである。社会的成長（ゴール次元での項目例<以下同じ>、「人間関係を広げるため」、「自分の能力を伸ばすため」）、非難回避（「働かないと世間体が悪いから」、「働かないとみっともないから」）、経済的向上（「裕福な暮らしをするため」、「金持ちになるた

め」）、家族配慮（「親孝行をするため」、「親を安心させるため」）、やりがい（「働くことが楽しいから」、「仕事そのものが好きだから」）、社会的貢献（「人から感謝されたいから」、「人の役に立つため」）、優越性希求（「人の上になつため」、「人からうらやましがられたいから」）。回答形式は5件法（1～5点）であった。

(2) 時間的展望質問紙（杉山，1994）：本尺度は、中学生の時間的展望を測定する尺度で、「過去・現在・未来に対する不満足」、「未来志向性」、「過去志向性」の3下位尺度から成る。回答形式は5件法（1～5点）であった。

実施日 2005年1月

手続き 担任教師により、無記名式の質問紙が特別活動の時間に配布され、その場で実施・回収がなされた。その際に、この質問紙の回答を担任教師が見ることはなく、ここで得られた個人情報研究以外の目的で使われることはないこと、ならびに回答結果が成績や内申書などに影響するものでないことが説明された。

結果と考察

(1) キャリア観測定尺度の検討

まず、キャリア観測定尺度のゴール次元尺度およびマスト次元尺度の各35項目について、平均値及び標準偏差を求めた。本尺度は5件法であることから、得点は1～5の範囲にある。平均値±標準偏差の値が1～5の範囲を超える項目は得点分布に偏りがあると考えられるが、該当する項目は認められなかった。

高校生を対象とした先行研究では、ゴール次元尺度において7因子構造が確認されている。本研究の対象は中学生であるが、高校生と同様の因子構造が認められるかどうかを検討するために、ゴール次元尺度において確認的因子分析をおこなった（Amos4.0を使用）。その結果、適合指標はNFI = .940、TLI = .958、CFI = .963、RMSEA = .081といった適合度を示し（注）、ある程度の適合が認められたと考えられ

た。同様に、マスト次元尺度においても確認的因子分析を行った結果、適合指標は $NFI = .935$, $TLI = .953$, $CFI = .959$, $RMSEA = .081$ といった適合度を示し、マスト次元においても適合が確認された基と考えられた。以上の結果より、先行研究で確認された因子構造が中学生に対しても適用できると判断し、7 因子を仮定した下位尺度構成を適用することにした。

次に、各尺度の信頼性に関して I-T 相関および α 係数を算出した。ゴール次元については、I-T 相関の値が社会的成長では $0.50 \sim 0.76$ の範囲にあり、非難回避では $0.53 \sim 0.72$ 、経済的向上では $0.43 \sim 0.74$ 、家族配慮では $0.42 \sim 0.59$ 、やりがいでは $0.50 \sim 0.67$ 、社会的貢献では $0.44 \sim 0.56$ 、優越性希求では $0.49 \sim 0.53$ であった。 α 係数については、Table 1 に示した通りである。マスト次元については、I-T 相関の値が社会的成長では $0.53 \sim 0.71$ の範囲にあり、非難回避では $0.47 \sim 0.66$ 、経済的向上では $0.55 \sim 0.82$ 、家族配慮では $0.67 \sim 0.70$ 、やりがいでは $0.36 \sim 0.67$ 、社会的貢献では $0.45 \sim 0.69$ 、優越性希求では $0.67 \sim 0.72$ であった。 α 係数については、Table 1 に示した通りである。これらの結果より、ゴール次元およびマスト次元の両尺度において、それぞれの下位尺度の項目間に比較的高い関連があり、各下位尺度内に高い内部一貫性があることが示された。

続いて、下位尺度を構成する項目の合計得点を項目数で除した得点を下位尺度得点とし、各下位尺度の平均値および標準偏差を Table 1 に

示した。下位尺度得点の偏りを平均値および標準偏差から検討したところ、極端な偏りは認められなかった。

(2) キャリア観測定尺度の平均値の比較

下位尺度の平均値について検討するため、下位尺度間の比較と次元間の比較という、二つの視点から分析を行った。まず、下位尺度間の比較を行うため、各次元において下位尺度の種類を要因とする分散分析を行った。

その結果、ゴール次元において有意差が認められた ($F(6, 1338) = 71.73$, $p < .01$)。多重比較 (Bonferroni 法, 以下同じ) を行ったところ、「社会的成長・家族配慮・経済的向上 > 社会的貢献・やりがい > 非難回避 > 優越性希求」という順に得点が高いといった結果が示された ($MSe = 0.51$, 5%水準)。同様に、マスト次元においても有意差が見られ ($F(6, 1266) = 87.75$, $p < .01$)、多重比較を行ったところ、「家族配慮・社会的成長 > やりがい・社会的貢献・経済的向上 > 非難回避 > 優越性希求」という順に得点が高いという結果が示された ($MSe = 0.48$, 5%水準)。

以上の結果から、両次元ともに得点が高かった下位尺度は、社会的成長と家族配慮であることが示された。これは、社会の中で個人として成長していくという側面と、家族の一員として生きるという側面の両面が、自身のキャリアを考える上でともに大きな意味を持つことを示していると考えられる。特に、社会的成長の得点

Table 1 キャリア観測定尺度の平均値・標準偏差・ α 係数

	ゴール次元			マスト次元			t 検定
	Mean	SD	α	Mean	SD	α	
社会的成長	3.64	0.74	0.90	3.66	0.77	0.91	
非難回避	2.89	0.88	0.84	2.83	0.82	0.81	
経済的向上	3.55	0.85	0.79	3.24	0.94	0.85	ゴ>マ**
家族配慮	3.62	0.82	0.67	3.84	0.95	0.83	ゴ<マ**
やりがい	3.23	0.94	0.77	3.39	0.89	0.72	ゴ<マ*
社会的貢献	3.28	0.80	0.71	3.27	0.88	0.81	
優越性希求	2.54	0.83	0.69	2.53	0.91	0.83	

* $p < .05$ ** $p < .01$

t 検定の結果において、ゴはゴール次元を示し、マはマスト次元を示す。

が高かった点については、安達（2001）の就業動機尺度では自己向上志向動機の得点が高かったという結果とも一致している。一方、両次元ともに最も得点が低かったのは優越性希求であった。安達（2001）の結果においても、本研究の優越性希求に近い上位志向動機は3下位尺度中最も低く、日本青少年研究所（1999）の調査でも、働く目的として「社会的地位を得るため」と回答したのは5.7%と低い結果であった。同様の結果は高校生（広田・佐藤，印刷中）や大学生（佐藤・広田，2004）を対象とした結果でも確認されているが、中学生においても、働き生きていく上で、個人としての成長や家族との関係性を重視し、他者との競争的關係の中でキャリアを捉えようとはしていない傾向が認められた。

次に、ゴール次元とマスト次元とで対応する各下位尺度の平均値を比較するため、対応のあるt検定を実施したところ（両側検定）、経済的向上において、ゴール次元の方がマスト次元よりも下位尺度の平均得点が有意に高く（ $t(221) = 7.10, p < .01$ ）、反対に家族配慮（ $t(224) = -4.48, p < .01$ ）とやりがい（ $t(230) = -2.25, p < .05$ ）においては、マスト次元の方がゴール次元よりも高いという結果が得られた。つまり、ゴール次元を基準に考えるとすれば、家族配慮とやりがいにおいては「将来自分はこうあらねばならない」という義務的な捉え方が強く、経済的向上においてはそうした意識が相対的に弱いことが明らかにされた。

(3) ゴール次元とマスト次元の相関

回答者ごとにゴール次元尺度とマスト次元尺度のそれぞれの下位尺度得点を算出し、相関係数を求めた（Table 2）。

まず、対応する下位尺度同士の相関を見ると、全ての下位尺度において有意な正の相関があることが確認された。個々の下位尺度ごとに相関係数をみると、やりがいを除く全ての下位尺度において、ゴール次元とマスト次元の間の相関係数が.60以上の値を取り、比較的強い関連が認められた。また、やりがいについては、

Table 2 ゴール次元とマスト次元の相関

	r	
社会的成長	0.75	**
非難回避	0.66	**
経済的向上	0.77	**
家族配慮	0.66	**
やりがい	0.44	**
社会的貢献	0.73	**
優越性希求	0.78	**

** $p < .01$

やや弱い相関が示された。なお、相関係数を算出する際に散布図を作成しその形状を確認したが、相関係数が低かった変数間の散布図においても特に大きな偏りはなく、天井効果や床効果は認められなかった。これらの結果から、「なんのために働くのか」という働く目的に関する考え（ゴール次元）と、「自分の将来がどのようにあらねばならないか」という生き方に関する考え（マスト次元）とが、中学生においても強く関連していることが実証された。同様の結果は、高校生を対象にした研究（広田・佐藤，印刷中）でも示されている。この結果に基づけば、働くということは将来の生き方の表れの一つであり、職業選択という枠組み以上の広い捉え方をする必要があると考えられる。つまり、「働く」ことを職業選択という限定された枠組みの中だけでなく、「どのように生きるか」というライフコースの枠組みの中で捉えることが重要であると言えよう。

(4) キャリア観と時間的展望の関連

キャリア観測定尺度（ゴール次元尺度およびマスト次元尺度の各7下位尺度）と時間的展望質問紙（過去・現在・未来に対する不満足、未来志向性、過去志向性）の相関係数を算出した（Table 3）。

まず、ゴール次元尺度と時間的展望質問紙との相関について検討する。「過去・現在・未来に対する不満足」との相関については、非難回避と経済的向上において正の相関、社会的成長、家族配慮、やりがい、社会的貢献との間に負の相関が見られた。つまり、過去・現在・未来に対して満足していない中学生においては、非難

Table 3 キャリア観測定尺度と時間的展望質問紙との相関

	時間的展望質問紙		
	過去・現在・ 未来への不満足	過去志向性	未来志向性
キャリア観測定尺度			
ゴール次元			
社会的成長	-0.39**	0.34**	0.11
非難回避	0.15*	-0.06	0.09
経済的向上	0.25**	-0.16*	0.12
家族配慮	-0.13*	0.17*	0.22**
やりがい	-0.25**	0.25**	0.03
社会的貢献	-0.20**	0.20**	0.07
優越性希求	0.06	0.16*	0.03
マスト次元			
社会的成長	-0.34**	0.37**	0.11
非難回避	-0.01	0.05	0.15*
経済的向上	0.16*	-0.05	0.13
家族配慮	-0.24**	0.22**	0.15*
やりがい	-0.25**	0.25**	0.09
社会的貢献	-0.24**	0.26**	0.19**
優越性希求	-0.04	0.14*	0.02

* $p < .05$ ** $p < .01$

回避や経済的向上ということが働く目的となりやすく、自分が社会的に成長したり、家族を配慮したり、やりがいをもったり、社会に貢献したりすることが働く目的とはなりにくいことが示された。「未来志向性」については、社会的成長、家族配慮、やりがい、社会的貢献、優越性希求において正の相関が見られ、経済的向上とは弱い負の相関が認められた。これは、未来に対する意識が高い中学生においては、社会的に成長し、家族を配慮し、やりがいをもてて、社会に貢献でき、人から認められることが働く目的となりやすいことを示し、裕福になることが目的とはならないことを示している。また、過去志向性については家族配慮のみが有意な正の相関を示した。つまり、過去に戻ってやり直したいというような非建設的な志向性を持つ中学生は、親に迷惑をかけないようにすることが働く目的となりやすいことを示している。

次に、マスト次元尺度について検討する。「過去・現在・未来に対する不満足」との相関においては、経済的向上で正の相関が見られ、社会的成長、家族配慮、やりがい、社会的貢献と

の間に負の相関が見られた。非難回避で有意でなかった他は、ゴール次元の結果と近似した結果であった。こちらは、過去・現在・未来に対して満足していない中学生においては、経済的に向上しなくてはならないという考えを持ち、自分が社会的に成長したり、家族を配慮したり、やりがいをもったり、社会に貢献したりしなくてはならないという考えは少ないことが明らかとなった。「未来志向性」についてもゴール次元の結果とよく似ており、社会的成長、家族配慮、やりがい、社会的貢献、優越性希求において正の相関が見られた。これは、未来に対する意識が高い中学生においては、社会的に成長し、家族を配慮し、やりがいをもてる仕事に就き、社会に貢献し、人から認められなければならないという考えが強いことが示された。最後に、過去志向性については非難回避、家族配慮、社会的貢献において正の相関が示された。つまり、過去志向性が高い中学生は、人から非難されず、親に迷惑をかけないようにし、社会に貢献しなくてはならないという考えが強いことが示された。

総合考察

本研究では、中学生が「働くこと」や「生きること」をどのように捉え、それらがどのような関係にあるのか、また、時間的展望のあり方とはどのような関係にあるのかについて検討した。その結果、中学生においても、高校生において確認されたキャリア観の構造が適用できる可能性が示された。そして、ゴール次元とマスト次元の対応する下位尺度同士の相関を調べたところ、全ての下位尺度において有意な正の関連があり、中学生ではすでに働くことと生きることを強く関連付けて考えていることが示された。さらに、時間的展望との関連を調べたところ、過去・現在・未来への不満および未来志向性との関係性が多く認められた。以上の結果を総合して、下位尺度ごとに考察する。

まず、社会的成長については、両次元ともに平均値が高く、次元間の相関も高かった。つまり中学生は、将来働いて生活していくことを考える上で、自己の社会的な成長を重視していると考えられる。また、過去・現在・未来に対する不満が低く、未来を志向している中学生ほど、その傾向が高いことも示され、時間的展望においてポジティブな態度を持つほど、自らのキャリアを考えるにあたり成長という視点を持つのではないかと推察される。

次に、非難回避に関しては、両次元ともにそれほど平均値は高くなかったが次元間の相関は高く、強くはないものの社会的に非難されたくないという動機をキャリア形成に対して抱いている可能性が示された。また、ゴール次元では過去・現在・未来に対する不満と弱い正の相関を、マスト次元では過去志向性と弱い正の相関を示していた。このことから、自らのキャリアを非難回避と結びつけて考える中学生も少なくはなく、そうした人は少なくとも生活への不満や過去志向的な時間的展望を持っていると考えられる。

経済的向上については、これも社会的成長と同様に平均値が高く、次元間の相関が高かった。しかし、時間的展望との関係では社会的成

長と異なり、過去・現在・未来に対する不満とは正の相関を持ち、ゴール次元においては未来志向性と負の相関がある点で異なっていた。つまり、キャリアを考える上で経済的向上という視点は多くもたれているが、この傾向は生活への不満度が高く、未来志向性が少ないほど強いことが示された。裕福になるという考えは、生活に対する満足や未来への志向がもたらすものではなく、現在や未来に対するネガティブな態度と関係していると考えられる。

家族配慮も社会的成長と類似した傾向を示しており、平均値および次元間の相関が高く、過去・現在・未来に対する不満が低く、未来を志向しているほど家族に対する配慮が高いことが示された。社会的成長と異なるのは、マスト次元の得点の方がゴール次元の得点よりも高い点と、過去志向性と正の相関がある点である。つまり、高校生を対象とした結果（広田・佐藤、印刷中）と同様に「家族に迷惑をかけてはいけない」という考え方は中学生においても優勢であり、そうした考え方が強い人は過去志向的でもあると言える。「家族に迷惑をかけない」という考え方は、道徳的な考え方ではあるが、自らのキャリアを形成していく上では消極的な態度であるとも見ることができ、そうした態度が過去志向性との相関に現れたのではないかと推察できる。

やりがいについては、得点の平均値は7つの下位尺度の中では、社会的貢献と並んで中央くらいの値の高さであり、次元間の相関係数は他の下位尺度に比べると低かった。また、時間的展望との関連では、過去・現在・未来に対する不満が少なく、未来志向的であるほど、やりがいが高いという結果であった。この中で最も特徴的な結果は、次元間の相関が低いことであるが、やりがいという概念には内発的な性質も含まれると考えられることから、「働くことを楽しまなければならない」というような義務的な考え方との関連性は弱かったのかもしれない。

社会的貢献については、やりがいと同様に得点の平均値は全下位尺度中で中央くらいの値で

あったが、次元間の相関は高かった。また、時間的展望との関連でも、社会的貢献と同様に過去・現在・未来に対する不満が少なく、未来志向的であるほど得点が高いという結果であったが、それに加えてマスト次元において過去志向性との正の相関も見られた。しかし、過去志向性との関連については本研究の結果からだけでは、解釈が困難であり、今後の研究の課題としたい。

最後に、優越性希求に関しては平均値が両次元において最も低く、次元間の相関は高かった。つまり、中学生における自らのキャリア形成において、他者に勝るということを重視する傾向は低いといえそうである。また、時間的展望との関連では、未来志向性と弱い正の相関が認められ、自分のキャリアを考える上で優越性を求める人は未来志向的でもあることが示され、全体的な得点は低くても時間的展望についてはネガティブな態度であるとは言えない。

このように、本研究の結果から中学生におけるキャリア観の特徴が示された。しかし中学生という年代は、実際に働いたこともないために、働くことや将来の生き方について、どれほど深く彼らが意識しているかは不明であり、個人差も大きいものと考えられる。家族の職業などの影響も大いに受けるものと予想される。今後の課題として、そうした職業的な点での家庭環境の違いも考慮した上で検討していくことが必要であろうと考えられる。

引用文献

- 安達智子 2001 進路選択に対する効力感と就業動機、職業未決定の関連について－女子短大生を対象とした検討－ 心理学研究, 72, 10-18.
- Benesse 教育研究開発センター 2005 第1回 子ども生活実態基本調査報告書.
- 服部環 2002 仮説をモデル化し検討する－構造方程式モデリング－. 渡部洋(編)心理統計の技法 福村出版. Pp.151-166.
- 広田信一・佐藤純(印刷中) キャリア観に関する

る検討－ルール認知の観点から－ 山形大学紀要(教育科学).

日本青少年研究所 1999 大学生の職業に関する意識調査.

佐藤純・広田信一 2004 大学生の労働観に関する探索的研究－労働動機の側面から－ 筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 31-36.

杉山成 1994 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, 42, 415-420.

注

共分散構造分析における適合度指標として用いられることが多いGFIおよびAGFIは、観測変数の数が30程度を超えるモデルにおいては参考にできないと指摘されている(服部, 2002)。本研究では、観測変数の数が35であるため、GFIおよびAGFIを適合度指標として用いないこととした。